

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム あさひ東館

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0390700060		
法人名	株式会社中央介護センター		
事業所名	グループホーム あさひ東館		
所在地	〒028-0014 久慈市旭町10-66-1		
自己評価作成日	令和4年4月13日	評価結果市町村受理日	令和4年6月20日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

数年にわたり、理念を『関わる全ての人の言葉に耳を傾け、その人の目線で物事を考える』と掲げている。理念そのものは変化はないが、理念に対する考え方や捉え方の変化が分かり、理念を変えないという思いにいたっている。利用者あつてのグループホームであるが、ユニットは利用者を中心に、利用者家族や職員、その他関わりがうまれる人たちが影響しあつて成り立て居る事を忘れずにいたいと考えている。単独ユニットとして独立している為、職員だけでなく、関わる人たちの存在を大切にすることが、利用者への良いケアに繋がると考えている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

三陸道久慈IC近傍の事業所は、県立久慈病院の移転に伴って、事業所が新設され、福祉関連行政機関等が入居する「元気の泉」や新久慈警察署もある、準官庁街的色彩の濃い地域にある。取り付け道路を挟んだ向かいには、系列のグループホームと小規模多機能ホームがあり、別事業所ではあるが相互に連携して運営されている。数年前に定めた理念は、利用者のみならず職員を含めた事業所に関係する全員を一体のものとして捉え、相互に寄り添い、相手の立場で考えることを宣言し、今は利用者職員が1対1で過ごせる時間の充実を意を用いている。また、帰宅願望の強い利用者によってその人の目線で物を考え「気のすむような介護」を実践した結果、不穏が解消した例がある。看取りが困難な地域にあつて、診療所長の協力を得ながら、法人幹部が中心に設立したNPO法人が、隣町で重度化・看取りを可能とする施設を立上げ、地域での医療と介護の連携にも寄与している事業所である。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和4年4月26日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム あさひ東館

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	『関わる全ての人の言葉に耳を傾け、その人の目線で物事を考える』を数年にわたり掲げる事で、理念の共有に繋がっている。構成するメンバーによって、理念の捉え方は若干変化するものの、基本的な考え方の共有にはなっていると思う。	理念は4年程前に職員が相談して作った。利用者の尊厳を守ることを主眼にし、「全ての人」とは職員を含む全員を指している。この理念の下で、利用者の変化を確りと観察し、きめ細かいケアを実践している。	理念の具体化を分かりやすく表すスローガンを掲げ、多様な実践の形を後押しすることについて検討されることを期待する。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	直接的に地域住民との交流は日常的に行ってはいない。通常であれば、施設行事への案内を出したり、秋祭りを見学している。	県立病院の移転に伴って事業所等が出来た地域であるため、住家は少なく地域住民との交流を進めにくい環境にある。それでも、コロナ禍前は、町内会を通じて盆踊りに招待したり夏祭りの案内をいただいていた。今年はまず、高校生の実習を受け入れることにしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	通常は、運営推進会議を通して地域の方へ取り組みを伝える様にしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議を開催している場合、会議の内容については、施設内の会議やユニット会議に反映している。	町内会長、近隣事業者、地域包括支援センターの複数の職員が委員になっている。コロナ禍ではあるが、行政からは書面開催でも行うよう指導され、対面又は書面で2カ月毎に開催し、入居状況やヒヤリハットなどを報告している。委員から会議の場で町内での困りごとを相談されることもあるとしている。	運営推進会議の委員に利用者家族を招聘すること及び介護職員の輪番での出席について検討することを期待する。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市の担当者とは、運営推進会議に参加して頂いているほか、毎月何らかの形で交流を持っている。	市の福祉関係担当課等が近隣の「元気の泉」にあることもあり、成年後見や事業所運営などについて様々な相談を持ち掛け、指導もいただいている。介護保険制度の見直し内容は全て広域連合からメールでいただいております。コロナ禍で必要な消毒液等の物品も市から提供されている。	

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム あさひ東館

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月の会議にて、身体拘束について議題にしている。また、年に1回は施設内研修で身体拘束を取り入れている。	身体拘束適正化の研修は毎年定期に実施している。施設長を講師として接遇研修を実施し、職員からはスピーチロックを含む言葉遣いに対する反省の言葉も聞かれるようになっている。車椅子利用者に対するベルト使用の例はなく、管理者は「職員はベルトの存在そのものを知らない」としている。防犯のため、午後7時から翌朝6時30分ころまで玄関を施錠している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	介護職員へは、資料や報告書を配布、内容周知に努めている。1年に1回虐待や身体拘束についての研修を取り入れている。また、毎月の会議で身体拘束同様に確認しあっている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	本年度はないが、以前に成年後見制度を適用したケースがあり、その内容を会議で議題とし共有している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に関しては、ご家族宅へ訪問又は来所して頂き、十分に説明を行ったうえでやっている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	月に1回施設長、管理者、当日の勤者が集まり会議(社内ケア会議)を行い、話し合いの場を設けている。	面会や通院同行、着替えの持参などで家族が訪れている。その際に伺った要望に沿って、利用者の好きなお刺身も食卓に載せている。コロナ禍での家族の面談は、予め電話連絡した上で個室で30分以内を目安に行っている。「家に帰りたい」とする利用者のケアに職員全員で取り組んでいる。	

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム あさひ東館

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1回各ユニットでユニット会議を開催し、現場からの意見を吸い上げ、連絡会議(各ユニットの管理者やケアマネが出席)にて検討している。	原則全職員参加で毎月開催されるユニット会議等で出された意見・提案について、近接事業所の両ユニットとの合同連絡会議で調整している。レク活動の企画やタブレット導入、駐車場の整備等の意見・提案があり、具体化している。年末からの個人面談では職員意見を把握しながら、リーダー職員の次年度の目標を設定し、モチベーションの向上にも寄与している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職場環境・条件の整備には取り組んでいる。今年度はアンケート調査の実施やユニット間の交流といった取り組みを積極的に行った。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	ユニット会議に合わせて、短時間の研修を毎月実施。 また、今年度から「人材育成」と「褒める(褒めて成長させる)」事を管理者、ケアマネ、そして現場職員に浸透させる取り組みを始めた。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	GH協会の役員を選出。研修や座談会の実施を検討中である。(今年度は、感染症の影響で未実施)		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ケアマネのアセスメントやケアプランを中心に本人の状態や意向の把握に努める。その後は、担当職員とケアマネを中心に、月1回のユニット会議内で入居者様の様子や変化等を話し合う時間を設け、情報共有に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用申請時の相談を受け、更に利用前に自宅(病院)へ訪問、本人、家族との面会等を行い再度意向要望を確認。その情報をまとめ情報共有を行った上で利用開始して頂くようにしている。		

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム あさひ東館

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族が必要とする支援に関して他のサービス利用を視野に入れる必要がある場合は、最初に併設している事業所の可能性を考慮する。さらに、その他のサービス利用の選択肢も家族へ都度提案している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人が出来る事は維持出来る様に支援している。また、利用者様同士の人間関係を配慮した支援を心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	現在は、事前連絡を頂き、別室での面会を実施。他の面会者同士が重ならない様に配慮している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	これまでの関係の継続は難しいが、新たにユニット内で、馴染みの関係を構築できるような支援を心がけている。	「久慈秋祭り」は久慈市民にとって特別のお祭りとして長年親しまれている。ここ数年、コロナ禍のため中止になっており、毎回ご招待をいただく利用者も今年こそ再開との思いを持っている。また、隣接の小規模多機能ホームからの入居では、可能な限り同一の事業所(ユニット)とし、友人関係を継続出来るよう努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係把握に努めている。利用者の「好き嫌い」に配慮した支援を行っている。(席や誘導の順番など)		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院期間が長くなり、利用中止(契約破棄)になったご利用者様に対しても相談に応じ、必要であれば経過をフォローしている。特に、コロナ禍である為、退所後の方へ転院のお手伝い等も実施。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	毎日の過ごし方や言動を観察し把握に努めている。担当職員を中心に、ケアマネと協力しプランにし、情報共有している。	隣接事業所と比べて、入居者で意思表示できる利用者が多く、職員は時間を見つけて1対1での会話を心掛けている。利用者の目立った要望は「帰宅願望」であり、職員は話題を変えたり一緒に出掛けたりし、気持ちが収まるよう、工夫を凝らしながら介護に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用開始前に本人の生活歴を調査した内容(アセスメント)によって、各職員が把握する様になっている。 また、日常的な会話の中から情報を得る様にする。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	バイタル測定や排便状況の確認等変化を追うことで現状の把握に努めている。 また、3ヶ月に1回位のペースで担当職員が評価を実施している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月行われるユニット会議で、担当職員とケアマネを中心に、利用者の変化や様子、必要な支援等を話し合っている。	ケアプランの見直しは6か月毎を原則とし、ケアマネと担当職員が作成した案を定例のユニット会議に提案し、職員からの意見を加味して作成している。帰宅願望の強い利用者のケアプランには、「利用者の気が済むような介護」として玄関を開けっ放しにし、散歩に連れ出すことを重ねた結果、改善できた例もある。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の記録は行っている。職員間の情報交換に関しては、日報等で申し送る。また、口頭でも申し送る様に意識している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の生活状況に合わせてサービス提供を行うように努めている。 全体で行うレクや体操の頻度を減らし、個別対応を意識したケアに取り組んでいる。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム あさひ東館

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	通常は、家族だけでなく近所の方、親戚など本人が今まで関わってきた方の把握に努め、面会等は柔軟に対応している。(コロナ渦以前)		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用以前の主治医がいる方に関しては、極力主治医を変更しない様な支援をしている。また、主治医が変更した場合も職員が同行したり、各病院の相談員と連携を取るようになっている。	事業所の都合でかかりつけ医を変更した例はない。利用者の大半が近隣の県立病院に職員の同行で受診している。家族が同行する場合には、主治医宛の連絡票を託している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師を配置してはいないため、適切な看護が受けられているわけではないが、併設施設の看護師に相談可能な状況ではある。さらに、受診対応に関しては異常があった場合極力早い対応を心がけている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院した際は、必要がある場合は情報提供を行う。また、退院に関しては各病院の相談員を窓口に関わりながら、家族の方とも連絡を取り退院後の受け入れ円滑に行える様に取り組んでいる。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事業所単独では実施していない。しかし、看取りに関しては、数年前より、関連施設が整備された為、「看取り」を希望される方には、そちらも紹介している。	地域に訪問看護師の派遣事業所が実質的になく、事業所での看取りは困難な状況にある。隣町の太田地区で運営法人も関与するNPO法人が大野診療所長の協力を得て重度化・看取りに対応出来る「共同住宅りんどう」を開設しており、状態の変化に応じて、その活用も勧めていきたいとしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応のマニュアルを掲示したり、AEDの講習会を開いている。(全職員が普通救命講習受講済み) また、職員には緊急性を感じたら迷わず119番通報(救急車の要請)するように、日頃から伝えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	昨年度は、水害を想定した訓練を実施。夜間想定で実施。	市のハザードマップで水害想定区域とされており、30センチ前後の浸水が懸念される地に事業所がある。昨年度実施した訓練では、隣接事業所の2階への避難に概ね30分程度要することを確認している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉使いや人格の尊重は心がけている。また、言葉遣いに関しても、ユニット会議での議題として改善に取り組んでいる。	事業所では、運営の重要な点は、理念の実践であり、1対1での寄り添ったケアにより、利用者のやりたいことを把握し支援することと考えている。利用者は一様に元気で過ごすことを願っており、規則正しい生活の中で体を動かし、美味しく食事をとれる介護を大切にしている。言葉遣いやプライバシーの尊重については、事あるごとに職員に徹底している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表現したり、自己決定できるように働きかけている	本人の希望を尊重し、自己決定できる様に支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人がその日どのように過ごしたいかの希望に添っている時間帯もあるが、基本的には、日課を取り入れたり、全体的な流れにそった支援をしている。 参加したくないという人の意思は尊重している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	乳液や髪結い、パーマ等多様な希望に添う支援をしている。身だしなみがちぐはぐにならない様、TPOに合った服装の手伝いをしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	本人の好みや能力に応じて提供しているが、苦手な食材がある場合は可能な限り代用品を用意して対応している。また、出来る利用者様とは職員と一緒に片付け等を行っている。また、おやつやの買い物や居室での飲食も実施している。	運営母体のレストランで調理し、盛り付けは事業所で行っている。「食べれる人は長生き」と刻み食の方には分けて盛り付け、食欲が湧く工夫をしている。利用者はたこ焼きやホットケーキのおやつづくりに興じ、誕生会のお刺身や茶わん蒸しを楽しみにしている。	

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム あさひ東館

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量の把握は行っている。また、体重測定を行い、体重の変化に応じた対応を行っている。また、水分補給には気を使い、お茶や水だけでなく、経口補水液を作り、身体状況や好みに応じて対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは行っている。なるべく本人に行ってい頂けるような促しを行っている。また、口腔内の異常を発見した場合は、都度歯科受診対応等(往診等)を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレ誘導や声かけ等の工夫をし、なるべくトイレでの排泄を行なって頂けるような支援を心掛けている。	排泄介助を必要とする方を含め、大半が自分の意思でトイレに行っている。羞恥心の強い利用者を除き、事業所ではオープンな声掛けを行い、職員も自信を持って排泄の現状維持を目標に介助している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘の状態(排便の有無)の把握には努めている。積極的に水分摂取してもらえるように、飲食物の工夫や運動の働きかけも行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴に関しては入浴日を設けて案内している。ただし、一人ずつ入浴しており、入浴時間は本人の希望を伺っている。	週に2回を原則に、月曜と木曜に時間をかけた入浴とし、足浴は希望等があれば毎日でも行っている。介助する職員1名と脱衣補助の職員の2名で介助している。入浴を嫌がる利用者はまず脱衣所まで誘導すること又は入浴日を替えて対応している。気持ちの良い入浴となるよう配慮している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝時間(消灯)は設けておらず、その人の生活習慣に応じて就寝して頂いている。また、昼夜逆転の予防としても、可能な範囲で日中活動的に過ごして頂ける様に支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	担当職員を中心に、本人の服薬状況の把握に努めている。誤薬や服薬もれをしない様に工夫をしている。服薬に関する問題点や疑問は、近所の薬局の薬剤師に相談できるように連携している。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム あさひ東館

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの生活歴や役割、嗜好品にも努めている。 季節毎のイベント(節句)を大切にしたレクを行い、気分転換をはかっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	帰宅願望がある方が中心となるが、施設周辺を散歩する機会を設けたりしている。また、バスバイク等が多いが、外出する機会も設けている。	コロナ禍のため、特にこの冬は外出がままならず、ストレス解消は室内での企画に依存し、節分や雛祭りの行事やビンゴ大会に興じていた。併せて、10時のラジオ体操が日課になっていたが、利用者が一斉に体操することよりも、職員が寄り添う時間に置き換えた方が望ましいとの考え方から、見直しすることとしている。管理者は、ウッドデッキで皆でお茶のみができる季節の訪れを喜んでいた。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	希望がある方や金銭管理が出来る方に関しては、家族と協議し所持金を管理してもらっている。 基本的には、金額は家族に決めてもらうが、高額にならない様に依頼している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人、家族の希望に添って対応している。 手紙を受け取った時は返事を促し、場合によっては一部介助している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	不快感や混乱をまねく可能性があるものへの配慮は行っている。 また、季節感を感じれるような貼り絵や飾り付けを心がけている。	エアコン、パネルヒーターで適温に調整されたホールには、南向きのテラスから十分な光が降り注ぎ、利用者は思い思いの席で寛いでいる。 ホールに配置してある二人掛けのソファと廊下に置いてある担架に転用できるベンチは、自ら一人になりたい利用者への配慮にもなっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間で気のあった利用者同士で過ごせるような配慮に努めている。 また、座席やテーブルの配置を配慮し、利用者同士の相性等を尊重して対応している。		

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム あさひ東館

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好み のものを活かして、本人が居心地よく過 せるような工夫をしている	居室へはご自宅で使用していたものを持込んで もらったり、家族や本人が希望するものを持込ん でももらい、少しでも安心できるような配慮をして いる。	居室の入り口には利用者の顔写真と名前を記し た紙の「表札」が吊るされている。室内には電動 ベッドと小物置きが備え付けられ、エアコンとパ ネルヒーターで空調されている。利用者は小箆筒 や衣装ケースを持込み、どの部屋も整理整頓さ れている。仏壇や位牌に毎日手を合わせている 利用もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づ くり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わ かること」を活かして、安全かつできるだけ 自立した生活が送れるように工夫している	出来ることは危険がない様に見守りをしながら、 本人に行っていただけるような支援を心がけてい る。		